論 文

M. アーノルド「自由主義の天底」及び日本統治機構の特質と矛盾 I

渡辺栄太郎

M. Arnold's "The Nadir of Liberalism", and the Characteristics and Contradictions of Japan's Sovereign Structure I

Eitaro Watanabe

1

本稿ではアーノルド "The Nadir of Liberalism" を取り挙げる。それに政治が哲学者に委ねられた人類史上殆ど唯一の実例と言われるマルクス・アウレリウスの言行録『自省録』を検討し，権力者の人格資質と人間社会との関係について，一つの理想的形態を考察してみたい。第3部以降は前論に触れた通り，日本史に二重権力の固定核として，変わらぬ制約を上から課してきた世襲天皇制を根幹に据え，戦後一応民主化で解放された研究成果を参考に，天皇制の成立とその本性の真実を科学に恥じない形で，今後二,三回続けて検討しようと思う。これは第二次大戦敗戦後に漸く可能になった事項であることを，付記しておかねばならない。

※ ※

"The Nadir of Liberalism"
『自由主義の天底』

1885年の7月，5年間の統治後にグラッドストンと自由党の閣僚は，下院選挙に敗れて総辞職した。ソールズベリー卿が首相となり，保守党政権が発足したのである。アーノルドは視学の仕事で当時ヨーロッパに滞在していて，選挙の結果を大いに気に掛けていた。グラッドストンは 'Home Rule' に強くこだわり，その計画を閣僚に話したとき，チエンバレィンとトラベリアンの2人は閣僚を辞してしまった。'Home Rule' は，ダブリンに議会と政府機関の設置を承認し，ウェストミンスター（英国議会）にアイルランドから議員を送らなくてもすむ趣旨の法案であった。翌86年11月末ごろ，アーノルドはフランスの一友人に「グラッドストン政権の最後の日に，自由党はその最低線（it's *nadir*）に達する」と語っていたという。4月21日には妻に手紙を書いてこの懸念を知らせていた。実際に彼の心配通りになってしまったが，その件について出版社の Knowles 氏の勧めで，この論説 "The Nadir of Liberalism" が書かれた。彼はこれで £50 の支払いを受けた。本来アーノルドはアイルランドの大義には同情的であり，イギリスの支配にはかなり批判的であっ

たという。（ミシガン大学「アーノルド散文全集XI」Critical and Explanatory Notes p.392-394）

(1) 'Demas hath forsaken me' —— so the deserted and dejected Muse of Literature may say —— 'Demas hath forsaken me, having loved this present world, and has betaken himself to this or that constituency.[1]'

「デュマは私を見捨てた」——こう見放され落胆した文学の女神は言うだろう，——「デュマは私を見捨てた。この現世を愛し，ここそこの選挙区へ向けてやってきていたのに。」

こう書き出して，この論説は始まる。現世を愛し，私（アーノルド）は文学的知的友人として自由主義の光を，偉大な中流階級に熱心に勧めても早15年以上になる。しかし我ら自由党の政策は国会に生かされず，私の勧告にも実りはなかった。政治の主力（the master force）である俗物・中流の心を癒そうと演説しても精神的に進展なく，立場に改善も見られない。今再び海外に出てきて自由主義政府下のイギリスの行動を見ると，その活動はなお低迷していることに気付く。ちゅうちょ，愚かしさ，外交の失敗が政敵を喜ばせ，友好国に驚きをもたらしている。唯素晴らしい事は，政策の執行中でも過誤に気付けば中止できることだ。その話し相手はこう語っていた。唯今はアイルランド問題がイギリスに立ちはだかっている。この問題で下院は無力を露呈し，ロンドンでのやじ馬や暴徒のニュースが報じられている。かつてイギリスには立派な業績を残す人材も居て，その影響力の重みに安住してきた。そこで今外交が不安定なのは威厳と理念の不足，着実さを欠いた中流階層の自由主義根性を反映しているからだ。下院でのスキャンダルや，アイルランド問題の緊急性に，中流と下層の自由主義者から成る大衆にはビジョンと知識が限られ，殆どその危険を意識していない。イギリスの外交政策は賢明で成功していると知らされれば，それを信ずる人びとで大多数を占めてしまう。サント・ブゥブはこれに疑問を投げかけている。自由主義者を指導し牽引するGladstone氏を偉大な政治家だと評価するLipton卿，Thorold Rogers教授，Reginald Brett氏，John Morley氏らが信頼と賞賛を表明しているが，法案を通して勝利しても，それが仕事の成功に結び付くものだろうか？成功の本質は結果にあって，そこを洞察するのが政治家の資質となるはずである，とアーノルドは述べる。

Cavour（カヴール）は統合されたイタリアを創り，Prince Bismarckは強いドイツを造るのに成功した。産業の成功は無でしかないが，ビスマルクは国家の危険と必要を察知して他者を満足させることに努めた。強いドイツは強いプロシァなしでは不可能だったし，オーストリア打倒なしにはドイツの統合は果たせなかった。Sadowaの戦いの勝利で領地や賠償を求めず，クリミア戦争で西欧列強（Western Powers）に組せず中立を守った。オーストリアはロシアの手でハンガリーから救われて，西欧列強に参加した。プロシァはフランスの伝統に挑戦してこれを破り，幾つかの州の割譲を得た。ビスマルクはナドナの戦いの後，ドイツ系オーストリアとして自分たちの側に加入させた。15年間オーストリアとロシアとの友好関係を保ち，ドイツを強化して尊重される国とし，ビスマルクは大ドイツ宰相（*Reicksanzler*）として勝利したのである。John Morley氏は，Kaiser Wilhelmの後には三国同盟（the Tripple Alliance）が解消され，その政策は無に帰すると語ってい

るが，ビスマルクは賢明で，我われの急進派が考えるより遙かに国家の安定に愛着を見せている。

所でGladstoneの勝利は，穀物法（the Corn Laws）の廃止で社会不安の危険を除いたという声もある一方，国家の必要とする自由貿易の発展と危険の除去に貢献したろうか？だがグラッドストンの偉大な機会の第一は，アイルランド教会を扱うことにある。当地の土地問題で議会の妨害に勝利し，カトリック感情を調停した。自由党新聞は彼を賞揚し，その閣僚たちを，「帝国の心を一つの調和する一致に縫い込めた」と称した。これにアーノルドは「アイルランド教会を廃止しても，理性と正義の精神を除いて解決はできない」と，自著“*Culture and Anarchy*”の言葉を引用して批判した。確かにアイルランド土地法案（the Irish Land Act）はグラッドストンの比類ない政治芸により通過したが，致命的必要性と危険除去には役立たない。保守党は漸新な計画を工夫せねばならず，自由党はそれを採用して協調しようとする。グラッドストン氏自身は拡充の時代に於ける英国社会の近代的発展に寄与する自由党員（Liberals）としての素養がある。彼の熱意と言葉の豊かさに多くの人は引きつけられ，貴族的排他性（aristocratical exclusiveness）を持たず，その謙虚さと真摯の精神は大衆を魅了するからである。かつてはLord Salisbury（ソールズベリー卿）が保守党を率い，既存のものの安全，恒久性を得る仕事の必要を満たしていたのと好対照である。

A Liberal leader here in England is, on the other hand, a man of movement and change, called expressly to the task of bringing about a modern organisation of society.(2)

「ここイギリスでの自由党のリーダーは，他方で，行動と変化の人材で，社会の近代的機構をもたらす課題に特に要請されている。」

今は現代的傾向とその必要に応えるべき時代であり，その変化に対応できない指導者は不健全である。グラッドストン氏はむしろJohn Stuart Millより興味を持たれる人物として，自由党（the Liberal Party）をそのエネルギーでプログラムを適応させつつリードして行くだろう。

※冒頭引用原文の‘Demas’は，原著の註に‘Paul to Timothy (Ⅱ), 4:9-10’とあるのみで大百科事典や，「世界文学事典」にも見当たらない。原著者アーノルドの綴り違いと見れば「椿姫」の作者の息子(fils)でなく,「三銃士」の著者でナポレオン時代を奔放に生きたAlexander Dumas (père)のことだろうか？いずれ題名の‘Ladir’と同じく，‘Demas’を引き合いに出して，論説全体に自由党への失望を表明しているのは確かである。当時の国際情勢，特にアイルランド問題の重要性を語っているが，大衆レベルの思考力の課題と政治家の資質について言及し，それにグラッドストンへの注文を掲げた。最後に,保守党と改革派(自由党)の本質を定義して(黒点部),有益な発言となっている。原文を全訳し，2度要約した後に，改めて制限内にまとめ上げて以上の記事となった。当時イギリスに於ても，改革というものの未熟さと困難とがよく表現されている。

(2) 中流と労働階級には奇妙な境界がある。中流の行為に対する感覚には知的透明さがあり，労働者は世界でも最も質が良く，農夫には忍耐，忠実と優しみがある。こうした人びとの共同社会から自由主義的政策（programme）が決定され，外交も扱われるようになった。一方，アイル

ランド教会が国教反対派の反感の余波で廃止の憂き目にあったが，我ら自由主義選挙民（Liberal electorates）は，いかなる善がもたらされるか，よく判断せねばならない。だが自由党の魅力あるリーダー（Gladstone）が完ぺきな議会運営をしても成功は得られず，ここに過激急進主義（Jacobinism）の出現する筋がある。これは不吉な亡霊で，嫌悪と破壊をもたらしたフランス大革命にその実例が認められる。

この時期，アイルランドは85名の地方自治官（Home Rulers）をイギリス下院（the House of Commons）へ送ってくる。このアイルランド問題をどう解決するかで，グラッドストン氏には大きな機会が託された。彼の寛大で熱心な感情と自治官たちの自由党への投票の成否が，大きく解決への行方を左右する。アイルランドは長らく忌わしい苛烈な統治を受けてきた。彼らは今熱く自治権を欲しているが，どうして我われは彼の欲しいものを与えないのか？カトリックの迷信的習慣が邪まなのか。アイルランド人には，大多数が望むものを与えよ！

It is a great blessedness for men to do as he likes; if men very much wish for a thing, we ought to give it them if possible. This is the cardinal principle of Liberalism(3);

「人間にとって自分の望むようにすることは大いなる天恵である。人が一つの事を強く望むのなら，我われは彼らにそれを可能なだけ与えるべきだ。これが自由主義の基本的原則である。」

Fox氏はこう公言している。また市民的困難を注視してきた或賢明な女性は言った。

'Quand les hommes se révoltent, ils y sont poussés par de causes qu'il ignorent; et, *pour l'ordinaire, ce qu'ils demandent n'est pas ce qu'il faut pour les apaiser.*(4)'

『人びとが反抗する時は，彼らの知らない原因で押されて行く。ソレデ，一般ニハ，彼ラガ要求スルコトハ彼ラヲ静メルタメニ必要ナモノデハナイ。』

この考察はまさに正当で真実である。アイルランドに分離した議会を与えるという計画は，イギリスの国家体制に重大な欠陥を生む。我が国のように込み入った島々から成る国では，政治的絆を緩くし感情的にイングランドと疎遠を招いたとしても，まだアルスター地方にはグレート・ブリテン人が数多く居住する。その友人たちをケルト・アイルランドに統合しようというのだろうか？私が希望するのは，彼らが真意を告げる間じっと耐えて待つことです。スコットランドやウェールズが自分らの議会を声高に求めていないのに，アイルランドが自身の議会を求めるのは理由にならないが，アイルランドが憤激しているのは，それだけ独自の議会を欲しがっていることを示す。彼らの怒りはお互いの政治的絆の問題ではなく，我らの振る舞いと扱い方に在る。あらゆる手段を尽くして扱い方を繕え！それは我らの愚かさにあり，相手に課している保証・制限が不満の原因なのだ。アイルランド人の光輝と活気は独自の立法部への誘惑を持つが，注目すべきは，有能なアイルランド人の適切で公的な分野は帝国議会（the Imperial Parliament）に在って，そこに彼らの健全な活躍域を見出せる。Whitbread氏のような思慮深いアメリカ人に耳を傾けてみよ。南部が力と人口で劣っても独自の議会を持てば，たとえ同質的政体であっても，北部ワシントンからは対抗する勢力に見なされるということである。

グラッドストン氏はアイルランド国会の設立を，アイルランド人に二者択一の方策で提案してい

る。だがアイルランドには4つの地方 Ulster (British Ireland), Leinster (metropolitan Ireland), Munster, Connaught (Celtic Ireland) があり，このうち Ulster と Connaught とは全く異質のものであって, Leinster は独自の都市的性格を持つ。それらの立法部と統治性を一つにまとめるのはウェストミンスターの帝国議会でしかなく，そこに第一級のアイルランド人が代表となり，各州の名士は地方立法部で調達できよう。これに対する非難は，当のアイルランド人の多数には存在しない。Ulster で全般的アイルランド国会を受け入れられるわけもない。Home Rulers (地方自治者) がアイルランド各州各地の要望を受容して行けるだろう。アーノルドはグラッドストンの統一アイルランド議会案に驚き，彼のエジプト政策の成功のようには巧く行かないと考えた。

グラッドストン氏はアイルランド教会やカトリック感情をなだめず，土地条例で農民の懐柔にも配慮せず，議会設立の冒険で危険の予知を洞察していない。アーノルドはこの予見を欠いた指導者に，大多数 (his Liberal majority) の信託を与えるのを心配している。活動の党派が制約され，後ろ向きで洞察に欠け，類稀な技巧と精力ある支配人に指導されている我らの立場の危険は重大である。保守と自由，2つの党派で互いの嫌悪と軽蔑に満ちた憎しみ合い，王権と王党派の免許 (the prerogative of the King and the license of the Cavaliers) が有る一方で，ピューリタンのぞっとする恐ろしさと広大な *ennui* (倦怠) がある。ヴァンディーン戦争 (the Vendean war) は古い政体 (the old *régime*) とジャコビニズムから生じたが，アイルランドにも内戦の危険がある。この情勢に合理的対処が出来なければ，アルスターの人たちは，だまってより低い文明に引き込まれはすまい。この危険はイングランド自体にもあるし，我われは変わらなければならない。このままの自由党の調子では，我らイギリス人にしても闘争せずして没落するに任せてはおけないだろう。

オックスフォード大学研究滞在中，たまたま出会った神戸女学院大学生10人を連れて学内案内の時，イギリス紳士に知らされて，中心街ハイ・ストリートの一角で皇太子一行と会った。自己紹介して「お元気ですか」と声をかけるとすぐ「ハイ」と答えられ，お人柄の良さを感じさせられる一瞬であった。お隣りはのりの宮。(1984年夏季)

※当時いかにアイルランド問題が，イギリス政界を揺さぶっていたかが判る。元来ケルト系のアイルランドに，1649年共和国を宣言したクロムウェルが反革命の拠点と見なして遠征し，徹底して収奪を行った。以来長い間搾取されてきたアイルランドは，グラッドストンの時代に解放を強く要求するようになり，上記の情勢を迎えていたのである。しかし1937年に共和国として独立し，アルスター地方は北アイルランドとなってイギリスに留った。それでも長くアイルランド共和国軍（IRA）の反乱が頻発したが，ブレアー首相らの努力もあり，今世紀にはかなり平和を取り戻している。現在アイルランド系アメリカ人は，本国の人口より遙かに多いと言われる。アーノルドはグラッドストンの議会運営を評価しながら，彼の政策には強く批判的であった。宗教・民族感情の違いには非常に難しい問題が生じ易い。戦前，皇民化思想を押しつけて領有した朝鮮半島にしても，このアイルランド問題から大きな教訓を得られたはずである。なお筆者が2度のニューヨーク大学での研究滞在中，下宿から程近くしばしば訪れていたセント・パトリック教会（5番街）はアイルランド系であった。本国のダブリンは，1984年，滞留していたロンドン，オックスフォードの雰囲気に馴染んでいたせいか，首都繁華街の賑やかさの中にあっても，筆者にはどこか淋しいひなびた印象があったし，ホテルの窓から見たのか向こうの屋根に，こうのとりが巣くっていた情景を今でもかすかに記憶している。

(3) 我らは心を自由で公正に働かせ，自らを欺かず，平明かつ単純な物事の真理を，その有る通りに見るよう努めねばならない。人間事情の流れを支配する法則は，国家にとって有益有害であろうと，我われの力に左右されるものではない。Ripton卿はグラッドストン氏の議会での勝利を賞揚するが，一面その政治的洞察の不足を見逃してはならない。

The Conservative party is the party of stability and permanence, the party of resistance to change: and when the Liberal party, the party of movement, moves unwise and dangerous changes, recourse will naturally be had, by sensible men, to the Conservative party.(5)

「保守党は安定と恒久性の党，変化に抵抗する党である。それで自由党，行動の党が，賢明でなくて危険な変化へと動くなら，賢人たちに依って保守党へと引き戻されるだろう。」

Burkeはこうした動機から，Jacobinismに抵抗するように保守勢力に身を投じていた。しかし国家的生命の進展に関する問題で，いかなる解決もこの勢力（保守）に頼って達成されたものは存在しない。もし保守党の行動が盲目であれば，また当然，自由党に呼び戻される。

カトリック教について　イギリスにとってカトリックは大きなつまずきの石となっているが，グラッドストン氏の法案はこれを公平に扱っていない。アイルランドの人びとが望むなら，カトリックを許すべきである。これは地方の立法部が適当と判断する力を持つべき場合で，Whitbread氏（アメリカ人）がコネチカット州に組合教会があった事を語るように，アルスターでは英国国教会（Established Church）を残したまゝで，カトリックを受容することはない。この両教会は決して一致するものではないからである。

土地問題　アイルランドの地主所有権とその賃貸性は，イギリスと同様に安全を保つ事はできな

い。イギリスでは社会の黙認が財産保全の保証をしているからである。これは人々と地主の一般行為双方の穏健さに負う。アイルランドでは没収，刑法，不在地主制の歴史から黙認という形は取り得ない。今も不在地主制は続いていて，ケルト・カトリック的地主制をイギリスの土地所有性と同じく保全することは不可能なのである。できることは，アイルランド地主の愚行と振舞いを矯正し，その損失についてはイギリスの知恵を以て善処する事であろう。Burke が言うように，アイルランド人とカトリック教徒（Papist）が心を閉ざしているのは，全イギリス（Great Britain）の階層にも責任があり，特に中流やプロテスタントの偏見が著しいことに依る。これはイギリスの共同社会または帝国議会で保護・保証されるべき問題である。ケルト・カトリックの地主には勿論，イギリス自由主義の天底にはまだまだ良い状況へ到達した徴候はないが，我らの最善の希望は現在の所，保守党の程よい合理的判断にかける外にない。Rosebery 卿や外務局，Harting 卿や Trevelyan 氏らの行動に希望を託し，Chamberlain 氏の政治手腕に期待しよう。自由党の大衆は未だ粗野で洞察力に欠けるが，大きな変化の波が来れば，社会の近代的発展が期待できよう。その確信から私自身を，未来の自由党員（a Liberal of the Future）と呼んできた。発展は序じょにやって来る。それで今やっと地方政府に合理的組織も出来つつある。理性的な総ての保守党員と自由党員たちが心を分かち合わせて，未来に向け善良な人たちのための基礎を構築すべきである。勤労階級の発展は中流の発展について来る。制約された中流の発展は，改善された教育と向上する合理的地方政治組織の努力に依ってのみ獲得される。たとえ現在良い予兆は存在しなくても，保守党員の理性と協力し，自由党員共ども現在の危機を乗り越えて，未来への洞察に富む自由主義を育てることが肝要である。

数週間まえミュンヘンで，私（アーノルド）は賢明で世に知れた Dullingers 博士と会談する機会があった。彼はグラッドストン氏の友人でもある。アーノルドは現在の懸念について話したが，結局，国のために自己の分を尽くすことが（善導の）力となる，ということであった。それに国家は永遠に続くものではない，と。（After all, we may sometimes be tempted to say mournfully to ourselves, nations do not go on for ever. In the immense procession of ages, what countless comunities have arisen and sunk unknown, and even the most famous nation, perhaps, is only for its day.[6]）

どこの共同社会も勃興しては消滅し，人間性は暗黒の時の中でそれぞれ憂慮を持ちながら，生死を繰り返す。毅然とした英国精神（English Mind）も，いつかは没落することが不可避だと悟ることは大切である。とらわれてはならないのだ。

※古典的な議会政治の論説ではあるが，大事な教訓を所どころに含んでいることに気付くべきであろう。アイルランドとイギリスでの宗教と土地所有の問題を，帝国議会で対処する必要を述べている。そうして結局は，自由党と保守党の理性的で良識ある議員たちに依り，合理的判断で対策が取られることに期待を寄せている。この論は 1885 年ごろ書かれたもので，イギリスが代議政治を発達させた西欧の中でも，代表的な国家であったことを示している。「議会政治」はイギリスが人類に与えた最大の贈物だという言葉もある。（このアーノルドの時代，日本では明治維新を経てもまだ憲法（89 年）さえ出来ていなかった）20 世紀には労働党の台頭で自由党は没落し，第二次大

戦後は保守党と労働党が政局を担って展開してきた。労働党のブレアー元首相が貴族の国会議員廃止の努力を重ねたが実現せず，従来の階級制も存続したままである。現代のイギリスでは流動し，変化する能力主義への転移傾向があるとされるが，それでも下層の人たちは立ち上がれずに多く病気にさらされ，寿命も短いという。2011年11月，「ウォール街を占拠せよ[7]」としてアメリカの大都市で始まった大デモは，ロンドンやパリにも波及し，特にロンドンでは通りがかった王室の車に投石か乱暴を働いたと，日本のテレビにも放映された。一見穏やかな日本であるが，格差の問題は社会の底辺に広く拡大してきていることだろう。尚，本2014年9月18日，スコットランド独立を目指した住民投票が行われ10％差で実現しなかったが，これは時代の変転を否応なく感じさせる歴史的事件であった。

2

プラトンは政治を哲学者の手に委ねることを以て理想とした，という。これを人類史上に唯一実現したのが，ローマ皇帝マルクス・アウレリウス（Marcus Aurelius Antoninus, AD121-180）の治世で，彼はストア派の哲学者でありながら，ゲルマンやパルチア人の侵入を防ぎ，国内を良く統治したことが知られている。マルクスは厳しく多忙な公務を果たしつつ僅かな余暇を見付けては思索を重ね，『自省録』(TA EIS HEAUTUN）を後世に残して，代表的賢帝として歴史に名を留めている。本章2では彼の遺著『自省録』（原典ギリシァ語）全体に見る思索の一端を，岩波文庫本から採択記述しておくことにした。その各章に続く数字は，当該の項目番号を表すものとする。

第一章　1，2，3，祖父からは清廉と温和，父から慎ましさと雄々しさ，母からは神を畏れ，惜しみなく与え，悪事を心に思わず簡素な生活を教えられた。　7. ルスティクスから，自分の性質を匡正し訓練する自覚を持つこと。　8. アポロニウスからは独立心を持ち絶対に僥倖をたのまぬこと，理性以外の何物にも頼らぬことを学んだ。ひどい苦しみの中にも，子を失ったときにも，長い思いの間にも常に同じであること。　9. セクストゥスからは親切で友人に対する思いやり，激情を色に表さず，物に動ぜず愛情に満ちた人間であること。　14. 兄弟セウェールスからは，万民を一つの法律の下に置き，権利の平等と言論の自由を基礎とし，臣民の自由を何よりもまず尊重する主権を備えた政体の概念を得たこと，哲学に対して常に変わらぬ尊敬の念を抱くこと。　16. 父からは，熟慮の結果一旦決断した事は揺ぎなく守り通すこと。虚栄心を抱かず労働を愛し，公共のため忠言する人に耳を貸し，公平に価値相応のものを与えること。

第二章　1. うるさがた，恩知らず，横柄な奴，裏切者，やきもち屋，人づきの悪い者に私は出くわすことだろう。この連中にこういう欠点があるのは，すべて彼らが善とは何であり，悪とは何であるかを知らない所から来るのだ。　2. 指導理性のこと，これ以上理性を奴隷の状態におくな。利己的な衝動に操られるがままにしておくな。　3. 神々の業（わざ）は攝理に満ちて居り，運命の業は自然を離れては存在せず，また攝理に支配される事柄とも織り合わされ，組み合わされずには居

ない。宇宙を保存するのは元素の変化であり，またこれらによって構成されるものの変化である。12. 死ぬということは何であるか。もし我々が死それ自体を眺め，理性の分析によって死からその空想的要素を取り去るならば，それは自然の業以外の何物でもないと考えざるを得ないであろう。14. 最も長命の者も，最も早死する者も，失うものは同じだという事，何故なら人が失い得るものは現在だけなのである。 17. 人生の時は一瞬に過ぎず，人の実質（ウシア）は流れ行き，魂は渦を巻いて，その運命は測り難く，名声は不確実である。肉体に関する総ては流れであり，霊魂に関するすべては夢であり煙である。人生は戦いであり，旅の宿りであり，死後の名声は忘却に過ぎない。

第三章　4. 各人に与えられている運命は宇宙の秩序の中に含まれ，またその中に宇宙の秩序をも含むのである。 10. 各人はただ現在，この一瞬に過ぎない現在のみを生きるのだ。

第四章　3. 理性的動物は相互のために生まれたこと，人は心ならず罪を犯してしまうこと，また互いに敵意や疑惑や憎悪を抱き，槍で刺し合った人々が今迄どれだけ墓中に横たえられ，焼かれ灰になってしまったかを考えてみるがよい。もういいかげんに心を鎮めたらどうだ。「宇宙即変化，人生即主観」 12. 常に用意すべき2つの思念，一つ，主として立法者としての理性が，人類の利益のために成せと命ずる事のみ行うこと。も一つは，君の一人よがりの考えを正し，それを変えさせようとする人が身近かに居れば，考えを変えること。但しこの変化は常にそれが正しい事であるとか一般の人々の利益であるとかいう確信によるべきものである。 21. もし魂が（死後も）皆存続するならば，いかに空気はこれらの魂を永遠の昔から包含しているのであろうか。 43. 広やかな心，自制心を持ち，賢く思慮深く，率直，謙遜かつ自由であること，これらの徳が備わると，人間の本性は自分の分を全うすることが出来るのだ。今後何なりと君を悲しみに誘う事があったら，次の信条を依り所とするのを忘れるな。曰く「これは不運ではない。だがこれを気高く耐え忍ぶことは幸運である。」

第五章　3. 総て自然にかなう言動は君にふさわしいと考えるべし，その結果生ずる他人の批評や言葉のために横道にそれるな。 23. 総ての存在は絶え間なく流れる河のようであって，その活動も形想因（アイディア）も変化して常なるものは殆どない。過去の無限と未来の深淵とが口をあけて，中に総てのものが消え去って行く。 27. 神々と共に生きること。ダイモーンとはゼウス自身の一部であり，ゼウスが各人に主人として与えたものである。これは各人の叡智と理性に外ならない。

第六章　5. 支配者の立場にある理性は自分自身の性向を知り，自分が何を成すか，いかなる素材でこれをなすかを知っている。 6. 最も良い復讐の方法は同じような行為をしないことだ。27. 人は一般に自分にとって自然であり有利である事に惹かれる。 28. 神々を畏れ，人を助けよ。人生は短い。地上生活の唯一の収穫は，敬虔な態度と社会を益する行動である。最後の時がやって来ても良心が安らかであるようにしておけ。 39. 君の分として与えられた環境に自己を調和させよ。君の仲間として運命づけられた人間を愛せ。徳の姿が我われと共に生きている人々の性質の中に現れていることほど，喜ばしいことはない。

第七章　1. 悪徳とは何か。あらゆる出来事に関し，「君がしばしば見た事があるものだ」という考えを念頭に用意しておくがよい。 9. 万物は互いに絡み合い，その結びつきは神聖で，殆ど一

つとして互いに無関係なものはない。 25. 宇宙を支配する自然は総て君の見るものを一瞬に変化させ，その物質から他のもの，それからまた他のものへとこしらえて，常に新たであるようにする。(万物流転) 36.［アンティステネスから］「善事を成して悪く言われるのは王者らしいことだ。」(*Cf.* 子曰，徳不孤，必有鄰（「論語」里仁第四）） 42.「善と正義は我と共に在り。」 50.「土から生まれたものは土に帰る。」 61. 処世術は舞踊より角力に似ている。全く予期せぬ攻撃にも，用意して構えれば泰然としていられるものだ。 69. 完全な人格の特徴は，毎日を自身の最後の日であるように過ごし，動揺も麻痺も，偽善もないことに在る。

第八章 14. なん人(ぴと)に出くわそうと，直ちに先ず自問せよ，「この人間は善悪に関していかなる信念を持っているか」と。 16. 自分の誤りを是正してくれる人に従う事もまた一つの自由行動である。 32. 人生を建設するには一つ一つの行動からやって行かねばならない。それで出来る限り目的を果たすなら，それで満足すべきだ。外から障害が起こっても，正しく慎み深く思慮深く行動するのを妨げる者はいない。 42. 私は自分を苦しめる理由がない。私は未だ曾って他人を意識的に苦しめたことはないのだから。 56. 我々の指導理性はそれぞれ自己の主権を持っているのである。さもなければ隣人の悪徳は，私の災いとなってしまうであろう。(指導理性→最高人格)

第九章 33. 見えるもの，見ている者自身も間もなく消滅してしまう。高齢で死ぬ者も夭折した者も，結局同じ事になるだろう。 42. 自ら問うてみよ。「世に恥知らずな人間が存在しないという事が有り得るだろうか」と。ありえない。ならばあり得ぬ事を求めるな。その人間は世に存在せざるを得ない無知な人々の一人なのだ。(人格障害の医科学的承認と自覚の必要)

第十章 30.（人のふり見て我がふり直せ） 33. 人間は悪い出来事に出会っても，これを正しく生かすことで一層優れた者，賞賛に価する者となる。 34.「吹き来たる風のままにも撒き散らされる木の葉にも似た人の性(さが)かな」 36. 死んで往く時，自分に振り掛かっている不幸を喜ぶ者の一人や二人に囲まれていない幸運な人間はない。

第十一章 1. 万物は同じであるから，ものの判った男なら四十歳ともなれば，過去に存在したもの未来に存在するであろうものを悉く見てきたわけである。 13. 何事に対しても怒りを抱かず，苦情を言わぬ心ばえの持主として神々の眼に映ずるようでなくてはならない。(1. 13. 共にリンカーンの言葉に一致する，「なんぴとにも悪意を抱かず」，「人は40歳になれば，その顔に責任を持て」) 15. 企まれた誠実は懐刀のようなものである。狼の友情ほど忌むべきものはない。 18. 怒るのは男らしい事ではない。柔和で礼節あることこそ一層人間らしく，男らしいのである。

第十二章 16. 悪い事をする心の持ち方をする以上，罪を犯すのではないか。だからその態度を直せ。(現代の精神医学，反社会性人格障害の考えにも関連する) 27. 自分に与えられた素材の範囲内で正しく生き，節制し，神々に素直に従う者として生きる方が，哲学者としてどれ程ふさわしいことか。

※　　※

これまでマルクス・アウレリウスの『自省録』から価値ある手記を採録してきたが，制約上これ以上の掲載は無理であった。しかしそこには統治する者としての心得と目指す人格の目標がよく示

されている。これは我われ一般庶民にとっても，日常努力すべき修養・修業の目安として誠に貴重な教訓だと言える。一面，まだキリスト教が世に流布する以前に，ギリシァ・ローマの世界で既に立派に人倫への思想・感覚が形成されていた事を表しており，その世界観も合理的にかなり確実に進んでいた事が判る。アウレリウスはストア派の哲学に傾倒し，それが生涯の心の支柱となっていた。そして執着を戒める言葉の陰に，幼くして亡くした我が子へのうずく思いがあったという。繁忙多難なローマ時代の後期に責任を一身に負い，政務や戦争に忙殺され，平和を求めながらも侵入するゲルマンに対し，軍の先頭に立って勇敢に戦った。この『自省録』はその陣中で僅かな余暇に書き留められたものである。徳高く気高い良心が宇宙の心に沿い，「指導理性」という言葉でこれを認識していた。『ローマ帝国衰亡史』を著した歴史家ギボン（Edward Gibbon, 1737-94）は，アウレリウスの統治を，「帝国の民族の幸福を統治の最終目標とした歴史上唯一の時期である[8]」と評したという。(私事ではあるが，これら『自省録』を読んで自分の運命，若くして逝った長男のことが回想され，目がしらが熱く，胸が詰まる思いがした)

3

(1) 1970年といえば昭和45年，筆者は都内早稲田の高校に在職している時であった。小説家の三島由紀夫が当時の自衛隊市ヶ谷駐屯地で（天皇陛下万歳と叫んで）割腹自殺したというニュースが報道されて驚いた事があった。彼は「楯の会」と称する私兵組織を持ち，総監室のバルコニーに多勢の自衛官を集めて，「諸君は武士だろう。武士ならばだな，自分を否定する憲法をどうして守るんだ[9]」と呼びかけた。天皇を中心とする日本の伝統と文化を守るという建軍の本義を守るため，憲法改正を掲げたクーデターに決起せよ，と訴えたのである。だが自衛官たちに一人も応ずる者はなく,「降りて来い」とか「聞こえねえぞ」という怒声が返っただけで,むしろ嘲笑の対象となった。三島の「天皇」のため「武士として死ぬ」というメッセージは，戦後育ちの自衛官には，遠くにかけ離れた無理な感覚でしかなかった。筆者は後84年,英国（欧州も含む）に研究滞在した当時,オックスフォード（大学）アービンドン街の下宿の女主人コーバックさんに「何て恐ろしい話でしょう。日本人って皆そうなの？」と問われて，一瞬返答に窮した事があった。彼は学習院時代に国文学者の蓮田善明を知り，「尊皇思想」を育て，高等科卒業時に昭和天皇の銀時計をもらっていて，招集に応じ特攻隊として死にたいと願っていた。だが医師の誤診で実現しなかったと言われる。

また，筆者は旧制中学の入試に，試験官から「特攻隊とは何か」という質問を最初に受けた。軍事教練を半年経験し当年八月に終戦，翌年新制に変わった。陸海空で実施された特攻隊は，「敷島隊」と名付けられた海軍航空隊を初めとする。当時敗戦は決定的となり，兵士の死を前提として発案された自爆攻撃であった。敷島隊の隊長関大尉は，「日本もおしまいだよ――僕は天皇陛下のためとか日本帝国のためとかで行くんじゃない。最愛の妻のために行くんだ。僕は彼女を守るため，最愛の者のために死ぬ。どうだ素晴らしいだろう[10]」と部下に語って飛び立ったという。この記

事は現在まで4冊程眼にしたことがあるが，内1冊は抽象的言及で，直接の大尉の発言はなかった。その後，筆者は平市（現いわき）内の国民学校（小学校）の一代表に選ばれ，原の町市に在る敷島隊の一員中野兵曹長宅を慰問に訪れた。残された母と対面したが，彼女は涙を見せなかった。帰途原町陸軍飛行場に立ち寄り，本土決戦に備え戦闘機が猛訓練していた情景は，65年以上経た現在でも鮮やかに記憶している。筆者自身の戦時体験は，真夜中のB29空襲で旧平市の2/3が焼土化し，私は弟を背負ってあわてて多勢の人に混り，郊外の知人宅へ逃れたこと，日中1トン爆弾で平一小全壊・校長殉職（軍臨時駐屯），発電所への艦載機による銃撃などを記憶するが，唯一つだけ次の経験を記しておきたい。

国民学校5，6年生の時であった。私の祖父は街でも知名人だったので，親戚の金成たた美さんは我が家から出征することになった。前日の夕方，彼と2人で小学校の校庭に遊びに行き，私は「明日（あした）出征を見送りに行くよ」と言った。たた美さんは，「送らなくていいよ，後（あと）で思い出すからね」と返事していた。それが彼の最後の言葉となり，2度と帰ることはなかった。恐らく死を覚悟していたのだろう。彼は20歳そこそこの年齢であったと思う。戦局は傾いていて，フィリッピン戦への援軍として赴く途中バシー海峡辺りで敵潜に襲われ，輸送船と共に水没してしまったのか，と想像していたものであった。多くの戦域･島嶼での敗走と餓死，玉砕。中でもガダルカナル島で，「後に続く者あるを信ず」と言って死地に跳び込んで散った若林中尉のエピソードなど，今は消えて振り返る人も居ない。

3月10日夜は，東京大空襲があった。死者約9万人重軽傷者11万人以上，火焰に取り巻かれ，住民は阿鼻叫喚の地獄であったことだろう。熱さから川に跳び込んで溺死した人も多数だったという。

昨2013年8月23日㈮の朝日新聞夕刊に，敗戦直後の文書発見について，「機密焼却，宮内省も指示」と題された記事があった。記者が宮内庁公文書館に残っているのを見つけ，陸海軍以外にも当時の政府機関中枢が焼却を指示した公文書の発見は極めて珍しい，とある。吉田裕一橋大教授は，「どんな文書が焼かれたかは定かでないが，昭和天皇の周辺では天皇が戦犯として追求される可能性を意識していたとみていいだろう」，と話している。（ここに言う天皇または天皇制というものは，余りにも国民・庶民の生命を軽んじたという事に疑う余地もない。その思いは避けられない）

筆者が今まで書店で拾い読みしたり藏書から知った終戦直前の事情の一部を，次に記しておこう。45年の7月26日，連合国は日本に無条件降服を迫るポッダム宣言を発表した。それで日本政府の最高戦争指導会議では政府と軍部が対立し，当宣言を黙殺する結果となった。これを拒否と見た連合国側は宣言第13項に従い8月6日，広島に原爆を投下した。8日にソ連が対日参戦，これまで度たび開かれていた天皇出席の重臣（側近者）会議で，「降服しても天皇制存続の保証はない」と発言する者が居て，態度が決まらず混乱した。その数日後，9日長崎に2度めの原爆投下を受けた。そこで止むを得ず降服と決したが，国民に知らされた無条件とは違い，真実は飽くまでも，天皇制存続が条件だったのである。第二次大戦，日本の戦死者数は約320万人と知られ，その上周辺国民にも甚大な損害をもたらした現実が存在するのを，決して無視することは許されないであろう。

(2) 以上に記述した天皇という存在が日本降服後も生き延びて現在に至るが，それがどのようにして敗戦期を経過してきたか，歴史家や政治学者の手に成る資料を探って，その一端を記録しておくことにする。粗雑な取りまとめでしかないが，一読してその全体像が判るし，前論まで扱ってきた戦後の「政治潮流」とも，可成り正確に連動していることに気付くだろうと思う。

［論理 21］ 柄谷行人（平凡社） 今日に於て史料的に明らかな事は，戦争期に天皇は戦争の過程に相当積極的に加担していたということ，更に戦後，天皇自身がその地位の保全のために画策したということです。つまり天皇制及び天皇個人の地位の護持という事が，当時の権力の最大の目標でした。イタリアは言うまでもなく，ナチス・ドイツが降服した後でさえ日本が戦争を続けたのは，なんら勝算や展望があったからではなく，降服の条件として天皇制の「護持」をはかって手間取ったのです。その結果として何百万人の兵士，市民が戦場や都市爆撃，更に二度の原子爆弾によって死ぬことになりました。にも拘わらず，敗戦の決定は，天皇自身の「御聖断」に依ってなされたという神話ができています。マッカーサー将軍は「国民が救われるなら，自分はどうなってもいい」と語った天皇に感動したということを伝記に書いていますが，これは明らかに虚構です。すべての命令が天皇の名のもとに成されている事は明らかです。その天皇が免責されているとしたら，結局，誰も責任を取る者はいないのです。誰も彼もが被害者になってしまいます。政治学者の丸山真男は，それを「無責任の体系」と呼んでいます。(p.148-149)（この天皇免責は，戦争末期顕著になった米ソの対立構造に根ざしたとする指摘が続くが，簡略のため省略。なお当時天皇一行の全国行脚は，天皇制継続確認のための周遊であった事が今更のように判る）

［天皇制の侵略責任と戦後責任］ 千本秀樹（青木書店） 戦争を指導してきた支配者は，壊滅的敗北の中で敗戦を「終戦」といいくるめ，「終戦の詔書」を裕仁がラジオで放送することによって天皇制の継続を国民に宣言した。天皇制のもとへ統合してきた国民の解体，即ち国体の崩壊を防ぐこと，「国体の護持」が最低限確保すべき至上目的だったのである。(p.139) これまでの支配体制が崩壊するなかで，唯一健在だったのが皇室でありその頂点に裕仁がいた。だから後継内閣の選定作業に於ても宮廷がその中心となり，裕仁に近い皇族が選ばれた。(p.141) 東久邇宮首相は戦後初の議会の冒頭で，敗戦に至った経過について――「天皇に対して申し訳がない。国民すべてが総懺悔を」というとき，もちろん懺悔する者の中に天皇は入らない。敗戦についての天皇に対する全国民の謝罪なのである。(p.146)（何という恐ろしい欺瞞なのか今更に驚かされる）

［日本帝国主義史研究］ 江口圭一（青木書店） 1975 年 10 月 31 日の記者会見で，戦争責任について質問された（昭和）天皇が次のように答えたことは余りにも有名です。「そういう言葉のあやについては，私はそういう文学方面は余り研究していないのでよく判りませんから，そういう問題についてはお答えが出来かねます。」天皇は皇位の保証を獲得するために，いかにマッカーサーにアプローチすべきか，全力をあげて考えたはずです。その結論は責任を東条になすりつけるより，自らがいっさいの責任を負うと申し出た方が，マッカーサーの心を握むことができるであろうという事でした。それは正解でした。(p.393-394) あれ程の惨たんたる敗北をきたしながら，王朝のみならず王位そのものを確保し続けることに成功した君主は，古今東西を通じてその例をみません。

しかもそれでいて，「慈父」の如き外見を国民に見せ続けたのですから，そのパフォーマンスの凄さには，もう驚くほかありません。(p.394)

[天皇制と軍隊] 藤原彰（青木書店） 便宜的呼称「宮中グループ」と言うのは，『木戸幸一日記』の「解題」で岡義武が行った規定に従えば，「天皇を初めとして元老西園寺公望，内府，内府秘書官長，宮相の如き天皇側近，若干のいわゆる重臣，並びにこれらの人びとと公的・私的に親近関係にあって協力した人びと」をいう。このグループは戦前日本の政治史に於て，法制上機構上の権限をこえた政治集団として，軍部・政党に匹敵する大きな役割を演じていた。(p.182) 政治勢力としての宮中グループの実質的な中心は，近衛文麿，木戸幸一，原田熊雄，有馬頼寧らの十一会（11人居たのでの呼称）のメンバーである。この人たちの共通点の第一は，「革新貴族」と称された右翼的性格である。(p.187) しかし究極的には軍部が国家権力を完全に掌握しえていなかったことが，天皇の「聖断」による降服の決定という一種の宮中クーデターによって明らかにされたのである。天皇を表面におし立てることによって，一見強力な存在であった軍部をも排除し，最高権力の所在がどこにあるかを明らかにしたのは，木戸や近衛に代表される宮中グループだったのである。(p.207) 官僚機構を占領機構に転化させ，天皇制の存置がアメリカ帝国主義にとっていかに有利かを理解させる努力である。来るべき米ソの対立を見越して日本における階級支配の存続がアメリカの世界政策にとって必要であることを様ざまなルートを通して強調したのである。9月27日天皇がマッカーサーを訪問したのは，こうした支配層の努力の一応の成果であった。この一連の支配層の努力を実質的に推進したのは宮廷グループ，及び官僚上層部であった。(p.222)

[「象徴天皇」の戦後史] 河西秀哉（講談社） 当初CIE（民間情報教育局）の案では，偏狭な天皇中心ナショナリズムの克服と人類的視点の強調を基本としていたが，天皇側の相つぐ修正要求で，天皇制下の民主主義秩序構築を図るものとされた。真実には「人間宣言」とは本質を異にする「新日本建設に関する詔書」として，1946年1月1日に公表されている。

[昭和天皇とその時代] 升味準之輔（山川出版） ジョージ・アチソン（政治顧問代理）は46年1月4日，トルーマン大統領に注目すべき覚書を送っている。依然として彼は天皇が戦犯であり，天皇制は民主化を阻害すると考えているが，占領統治の現実から見れば，天皇制の存置が最善の策であろうとしている。(p.59)

[昭和天皇の終戦史] 吉田裕（岩波新書） 宮中では，45年の末頃から天皇の側近グループの間で，戦犯裁判への対策が練られ始めていた。(p.98) 47年12月31日の東京裁判の法廷で，東条英機被告は，「日本国の臣民が陛下の御意志に反してかれこれするということはあり得ぬことであります」と証言した。すでに天皇の免責を決めていたキーナン首席検察官は，この証言のもつ危険性に気づいてすぐに行動をおこした。(p.114)

宮中グループの人脈（血縁同盟）「武家，公卿，皇族という伝統的特権支配層と，明治以後の新階層である藩閥政治家ないし官僚，軍人，ブルジョアジー」とが，婚姻を通じて，「多角的に接合」している事実に注目し，そこにパワー・エリート内部の「意図的な血縁同盟」の存在を見出している。（「日本ファッシズムの社会構造」（岡部牧夫））宮中グループは，このような姻戚関係を通じて，

様ざまな勢力との間に独自の人脈と情報のネットワークを作りあげることに成功していた。(p.225)

[皇室のすべて（図説)]（学研） 藩屛と閨閥（宮家と外戚）これら華族層は，政治・軍事・経済の全分野にわたって日本を支配し，皇室の藩屛として，天皇の神格化や神州不滅の日本という幻想，日本が世界の支配権を握っているという八紘一宇(はっこう)妄想などを押し進め，国民を洗脳していった。(p.194)（この「八紘一宇」という言葉は，国民学校の書きぞめなどによく使われていた）

[天皇新論] モジ・カンパニー，まとりたVol.13 星雲社'02年3月。p.124-125.　国連加盟194か国。この中，王国数27。欧州10，アフリカ3，アラビア半島6，アジア・太平洋8。当書出版後ネパールが共和国に転換したため上掲の数字となる。ただし北朝鮮は共和国を名のりながら事実上の世襲王権が支配，シリアは大統領が世襲され，民衆を敵に回して争う。

4

(1) **天皇制存続と日本文明** マッカーサー元帥が天皇を戦犯から除外し，天皇制を許容した理由を簡単にまとめてみる。 1. 日本から天皇制を廃止するには，余りに国民に皇民化思想が浸透していて，民主制を育成拡充するため2, 30年かそれ以上数十万の連合軍を駐留させねばならないと考えた。当時のマッカーサー声明が語っている通りで，実際に少年であった筆者も記憶している。2. 第二次大戦終了後，対ソビエトとの関係悪化から，日本に反感を持たれる不利を考慮した。 3. 天皇側近や宮中グループを始めとして，特権階級各層が自己の特権保持のため，強力かつ執拗に天皇制擁護に尽力画策した。(この情勢と影響は現在にも大きく生きている) 4. 天皇制を生かし，天皇の協力を得ることで統治を円滑に進める道を採った。イギリス王室に打診したが，英王室は当然日本の世襲王制を認め，政治に関与させないよう勧告したと考えられる。真実には各連合国政府とも勿論，天皇制には反対で，アメリカ政府・国務省でさえ，マ元帥の決断を予期しなかったと言われる。 5. マ元帥はトルーマン大統領と余り親密でなく，自らの大統領立候補の意向があったとすれば，日本統治の成功を，大統領に印象付ける気持ちもあったと言われる。

さて，戦前日本を訪問したアメリカの哲学者ジョン・デューイは，「日本は技術を輸入したが，精神（民主主義）を学ばなかった」と語ったという。それで，『文明の衝突』論で名高い Samuel P. Huntington 教授の著作『文明の衝突と21世紀の日本』(‘Japan’s Choice in the 21st Century’) から，筆者の記憶する日本人への提言を次に載録しておきたい。

1. 天皇を頂点とする縦社会である。2. 国民は友好的でも，閉鎖的である。特に周辺異民族や部落問題でのヘイト・スピーチなど(島国根性)。3. 国民自身では改革ができない。4. 孤立した文明で，他に共通し類似する文化または文明を有しない。

(2) **統治権と責任** 私ども国民が承知していたのは，天皇がマッカーサー将軍と会見した時，「自

分はどうなってもよい，ただ日本国民の窮状を救って欲しい」と言って，一枚の2人並んで撮った写真のイメージだけであった。勿論，会見は一度だけの印象だったが，実際には60年以上経過した2009年頃，会見は11回行われていたと外務省から公式発表されたのである。国民は天皇が免責され，東京裁判に起訴されなかった事は知っている。その後，今から3, 4年前の読売新聞（ナベツネ主宰）に，日本に「天皇制は定着した」という記事が掲載された。(民主主義に適応したと言うことである)

所で，第3章で採択してきた著作者たちの記事には，幾らかの行き違いが有るとしても，良心と知性ある人ならば，これらの記事はデタラメでなく真実であると誰もが認められるであろう。日本の現状を説明するのにも，大きな鍵になる筈である。そこで先ず気がつくことは，表面に伝えられてきた事と，真実とでは余りに落差が大きいという現実である。「秘密とタブーの日本皇室」という言葉もあるが，これらの記事には，実は筆者も新たに知らされた内容も多い。次に，天皇について戦後数多くの論説が世に出されてきたが，筆者にとって唯一つ取り挙げたいのは，マルクス・アウレリウスで見た通り，また世界の歴史を学んだ上で，**統治権とその責任の不可分性**は，人間世界の根本原理として欠かし得ない真理だということである。民主政治だと言うなら尚更である。丸山真男が「無責任の大系」と称したのも，誠に正鵠を得た見解であった。特に「天皇を頂点とする縦社会」であれば，最高位に在る者が責任を取らなければ，責任の所在が無くなるだけでなく，国民を代表する元首の資格を放棄したことを意味する。それでは自ら統治者としての資格を否定し，その地位は単なる既得権で，上から国民を拘束するだけの，無意味で有害，自己本位な利己的存在と化してしまう。(先年スペイン王室費は国民の苦況を見て公表されたが、現在，皇室維持費は公表せずに毎年300億円ほどを税金徴収し，11か所の独占領地を持つ上，国民を差別し階層化する制度になっている。—ときの情報公開法による）まして第二次大戦まで，「戦死する時は天皇陛下万歳と言え」と教え込まれて，神なる天皇の命令，徴兵（拒否は銃殺刑）に応じて勇戦散華した大戦320万の将兵の死は，一体何のためのものだったのか？　前述したマルクス・アウレリウスと天皇裕仁との人格・言動の様態など，参考にはなっても余りに隔り過ぎていて，比較など仕様もないのは明らかである。改めて言うと，物事に権利と義務が表裏一体であるように，国民への責任という義務を負わない所に国家の統治権は生じないし，その統治権は存在もし得ないのである。マ元帥との会見に述べたような口先だけでは，成立するはずもない。

(3)　**天皇と側近**　天皇側近という特殊かつ無視できない，重大な存在がある。国民・庶民のあずかり知らない所に在って，その内輪の働きと国家への影響力は絶大であった。「十一会」などはその典型である。彼らは事実上の最高特権階層であり，天皇の当時日本一の莫大な財産を別としても，同じく国税に支えられ，天皇擁護と自己保身に腐心する存在でしかなかった。ましてこの固定した世襲特権（皇室）とこの特権取巻き層とでは，両者そのものが強い相互依存関係にあった。マッカーサー将軍との会見では，当然天皇にお膳立てと入知恵していた事は想像に難くない。戦後この側近グループは廃止されたと思うが？，役割の一部は宮内庁に引き継がれ，今日では世襲特権議員らが

別面で同じ作用を果たしていると考えられる。彼らは政権党を支配して何回でも議会選挙に当選する仕組みで大臣となり，議員仲間に上下関係を作って長く与党幹部として特権層化し，世襲天皇制と利害を共有する結果となる。三権分立を厳格に実施し，行政府の長が議会と別個に選ばれるなら，彼らが特権者（大臣）になる機会は遙かに減少する傾向が生じる。議会と行政府の利害関係も当然薄くなって行く。日・米の世襲議員数の大きな違いにそれは明白に表れていると言える。アーノルドは19世紀に貴族の廃止を唱えたが，イギリスでは今だに貴族議員は存続するし，他の王制国家で議会選挙が実施されていても，政治的原理として，王室を別にして他は平等という結果はもたらされないであろう。アメリカでは世襲議員は5%，天皇制日本では世襲数はその10倍をゆうに超える。固定権力の下では，政治的特権層の発生は避け難いと言える（縦社会の原理）。現在の自民党政権で首相安倍晋三，副総理麻生太郎氏らの閨閥的存在はこの特権階級の現象を明確に裏付けていると考えてよい。

その上，首相経験者には天皇から勲一等，その他下じもの者にも位をやる，位をやるという叙勲制度で，国民から徴収した税金で国民を格付けする仕組みとなる。これも戦後，自民党の要請で改めて復活したという。これこそ日本の文化，伝統と称するものの実態で，右翼主義者の依り所とする世襲天皇制の働きなのである。自民党は前身の自由党が，戦時に国民から強制徴集したダイヤ・貴金属類を元手にした右翼主義者児玉誉士夫の資金で，天皇制の維持擁護を条件に発足したことは，以前の拙論に述べた通りである。公表されたことのない皇室維持費で，表面上粗食してます。災害にお見舞いしてます。国民に役立ってます，お祈りしてますと，新聞その他で一般に知らされているが，宮家を別に皇室だけで年間300億円ほど（専用ご用地11か所）に達している。その詳細と資料については，後論で，改めて触れる機会を持ちたい。

(4) **存続する特権階層**　これまで，中心に固定権力が存在すれば，必ず周囲に特権階層が出現・存続する現象に触れてきた。固定した中核権力が全く行政に関わらなくても，存在するだけで政治的特権階級，支配階層が発生してくる現実である。右翼主義者が言うように，自由・民主主義は日本の文化・伝統でないからと昔の皇民化社会に引き戻そうとしても，国民大衆がいかに鈍く無関心であろうと，戦後の民主化生活から得た教訓によって，それに引きづられて行く事はないと信じたい。万が一にもそんな事があってはならない。それが歴史の文明的発展というものである。一昨年頃入手した『知られざる日本の特権階級』という書に，次のような記事がある。「時代に逆行するかのような政財界が世襲の度合いを強め，経済格差が進行することで，学歴すら「親しだい」で決まると言われる現状が生まれた。権力と財力が一極集中していた，まるで戦前のような時代状況があぶり出されている」，「「格差社会[11]」と呼ばれる日本を覆う閉塞感―日本のカラクリ」という表現である。そしてこの書物には政界の超名門や官僚たちについて具体的に記してある。各界の代表にも言及があるが，筆者は特に，国民生活に影響の大きい政治的特権層と一部財界にしぼって取り挙げる事にする。これは殆ど閨閥的結び付きを持ち，閉鎖的支配層を形成しているものである。次に記載された家系・人物の一端を挙げてみる。筆者には何か，天皇制日本という国家社会の裏構造

を見る思いがしてならなかった。総理輩出の名門各家：鳩山，岸・佐藤，中曽根，竹下，宮沢（政界の知性，叙勲辞退），小泉，安倍，田中（異色の存在）の各家。それに福田康夫，麻生太郎，「太陽の季節」と弟裕次郎で名を売った石原慎太郎（三島由紀夫の友人）など。皇族との縁戚関係を持つ家系も，当然存在する。いや天皇家に近ければ近いほど，「名家」だという。それに国権の最高機関だという国会には，世襲議員が多過ぎる。彼らは，自分らは優秀だから選ばれてくるんだと口にしているとのこと。勿論上掲の名の他にも，あまた存在するであろう。官僚エリートというのは政治家ほど一般に知られていないが，いかにもそれらしい風采の財務省出身で日銀総裁候補だった武藤敏郎氏を除いて，ここでは個人名は省略したい。しかし日銀のほか，財務省，経産省，外務省など，それぞれに特権的地歩を占めている役人たちが存在している。次に財界である。その名家といえば，天皇に関わる正田，小和田家のほか，川嶋，豊田，住友，堤，麻生，裏千家，湯川，冷泉，佐治・鳥井（サントリー）の各家が名を連ねる。

「政・官・財・メディアそれぞれに張り巡らされた人間の「血脈」は，彼らの行動原理を大きく規定し」，「やがては古きシステムの中に組み込まれ，庶民との間に見えない，強固な壁をつくり上げて[12]」行く。テレビマン・女子アナらの虚飾のエリートの紹介もあるが，一方で，清貧エリートとしての新聞記者の役割の紹介には，我われ一般人から見ても充分評価できるものがあると思える。だが大新聞・テレビのマスコミを，長期独占支配する会長などの存在はどうしたものだろうか？

更にもう一つ，特権階層として見落せない存在がある。それは歴史的或いは伝統的特権階級と称すべきもので，『藤原氏の悪行』という思い切った標題の著作に，その一端が記されている。それに依ると，天皇家と日本歴史とは藤原氏の正体・素性が判らなければ，理解できないと言う。藤原氏は長年にわたって朝廷の血統を独占してきた。京都の公家―近衛・鷹司・九条・西園寺・徳大寺ら特に身分が高いという家系，他に岩倉・三条の名も知られている。彼らはみな中臣鎌足の末裔藤原氏で，歴史の経過の中で一時姿を消したが，明治維新で復活し，華族の頂点として君臨した。第二次大戦後の現在でも，知られざるネットワーク（閨閥）を構え，日本国家の陰の支配者として成功してきた。それは今「藤原」といわず，別姓を名のって気付かれていない。彼らの閨閥ネットワークは政治家，官僚，財界の中枢を固めて日本支配階級をまとめ上げているという。その祖先は中臣（藤原）鎌足であり，その子不比等は飛鳥の680年代以降，最高権力者となって「日本書紀」，「古事記」を書かせた。ここで高天原・天孫降臨・万世一系という神話が編み出されて完成した。この日本初めの二種の歴史書と，血生ぐさい藤原氏の皇位継承への関わりに，『天孫降臨の夢』などという他の研究家の探った事実とで，相補って一致するのには，筆者も誠に驚きを感じるほかなかった。尚，鎌足は百済（くだら）からの外来人だったとする『藤原氏の悪行』の著者に依る有力な推論がある。（これで日本は民主主義国家なのかな，と思うと，暗然としてしまう）

(5) **情報開示と教育的自由の大切さ**　明治憲法第一条に「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇コレヲ統治ス」とあり，第三条で「天皇ハ神聖ニシテ犯スヘカラス」としていた。神なる天皇が唯一人，日本を統治する国家であった。更に「教育勅語」では「君ニ忠ニ親ニ孝ニ，一旦緩急アレバ義勇公ニ

奉シ」とあって，毎年の学校儀式に校長が全生徒の前で恭しくこれを奉読し，生徒はこれを暗誦させられた。校門を入った所に「奉安殿」（天皇・皇后の写真を安置）が設置され，登下校の際に必ずこれに最敬礼をする習わしであった。授業中でも，「畏（かしこ）くも天皇陛下におかせられましては—」などと言われれば，気を付けをして身を正したものである。それに軍隊式ビンタ教育。そうして徴兵制下，天皇のために死ぬことは最高の名誉とされた。軍隊幹部と天皇臨席の会議で戦争が決定され，昭和 16 年（1941）12 月 8 日に天皇の「開戦の詔勅」で，「天祐を保有し，—」と天の助けを身に体して戦争に突入したのであった。議会は大政翼賛して政府に追従，国民には修身教育と軍国主義が徹底され，強い報道規制が課せられた。まず真珠湾攻撃とマレー半島上陸が決行され，半年後ミッドウェー海戦に敗北してから中国を含む広い各地海域で玉砕・撤退を重ね，現地住民を巻き添えにしながら敗退してきた。これに特攻を繰り返しても焼け石に水で，本土の都市は殆ど焼土と化した。それでも政府と軍部は敗戦を転進と言い，勝った勝ったと虚報を流して本土決戦の気構えを強調したのである。ソ連が参戦，原爆を広島と長崎に受けて漸く終戦を迎えた。国民生活は窮乏し，無理な国債を買わされ，将兵は戦友の屍を乗り越えて勇戦奮闘したことであろう。数十万の民間の犠牲もあった。戦争が終ってホッとしたはずだが，少年の筆者には，米兵の残虐さが宣伝されていたので本当は不安であった。その後アメリカからの配給などを受け，恐ろしい不安はなくなったのだった。あの戦後の解放感ほど，私が自由を感じた時代はなかったと思う。しかし政府関係者その他支配層の人物に民主主義の感覚はなく，結局止むなく，GHQ が憲法を制定した事情は，先論「アーノルド平等論と戦後日本の大変革」に記しておいた。真実には大戦前からも報道は政府・軍部に依って強く統制され，国民はその虚報の中で生活していた。報道というものがどんなに大切なものか，国民は理解し，自覚しなければならないことを教えている。教育の国家統制，「修身」教育など，権力者の望むような皇民化思想の押し付けは，国民大衆の基本的人権の尊重に反するだけでなく，絶対に排除しなければならないものである。終戦直後数少ない教科書に墨塗りを施し，いつの間にか奉安殿が撤去され無くなっていた不思議を，今でもはっきりと記憶している。また焼け跡の街通りに本土決戦用の飛行機の残骸がさらされ（現いわき市），中学校の訓練用旧式銃は没収，後暫くして長野山中に天皇避難用の巨大地下施設が造られていたことが知らされた。「大日本帝国は神国なり」，「戦争に負けた事のない神の国」と言い，その神である天皇は敗戦の責任を取らず感じもしない，という国家。何よりも特権層に都合のよい情報を流し，不利な情報は隠すという，我が国特有の習性は，今後どうあっても改めて行かねばならない。そうしなければ，国民は永久に解放されることはないし，国民の基本的人権の尊重が確立されることもないだろう。最近，裕仁は「万世一系」を頑なに守って退位しなかった，という評論もあった。

現在，野党が分裂して，安倍晋三政権が独断的で強引に政策を施行するようになった。元来，特権階級人で右翼といわれた安倍は秘密保護法，靖国神社参拝，NHK 支配，教育干渉（愛国心育成），集団的自衛権容認，それに原発復活をアベノミクスという甘い汁に乗せ，やがての憲法改正に向けて独断的に駒を進めている。当然多くの有識者から強い懸念が出されているのも無理はない。こういう人物が最高権力者として出てくるのには，三権分立の不全（議院内閣制の限界逸脱）と，晋三

内心の秘匿性に発する情報開示の不徹底が根底に潜在しているのではないかと思う。将来多くの日本人の血を流さないですめばよいが，と筆者は考える。

※　　※

アーノルドの「自由主義の天底」では，保守党に逆らう自由主義に社会の先進性と開拓性を見ていたが，思うように進まない困難さに苦悩を深めていた事がよく判る。一方，日本では永く世襲天皇制が続いて，戦後未だに天皇を囲む特権階層が政治の実権を掌握している実態に気付く。伝統的に皇室に依る祭政一致で，本質的な政教分離が成されていないのが特徴である。安倍政権の動きを見ていると，議会選挙が行われていても，せいぜい日本は制約民主主義の国家でしかないと悲観を覚える。真の民主主義とはどんなものか？数多い類書を読み，欧米での生活体験と自分の人生とから国家の仕組みを考量して上述の論となった。宇宙が絶え間なく変転するように，常に改革して力が日本の庶民各層に行き渡り，国運の再生に貢献できる道を，私は探って行きたいと考えている。

次回では，国政の根幹にある世襲天皇制の本性と正体を，歴史的観点から確認しておくことにしたい。

[註]

(1) "*The Last Word*", The Complete Prose Works of M. Arnold, XI. Ann Arbor, The Univ. of Michigan Press. p.54, *l*.1.
(2) Ibid., p.64, *l*.1.
(3) Ibid., p.66, *l*.12.
(4) Ibid., p.66, *l*.20.
(5) Ibid., p.72, *l*.22.
(6) Ibid., p.77, *l*.18.
(7) *Cf.*『私たちは‘99％’だ』，「オキュパイ！ガゼット」編集部，岩波。
(8) 『自省録』マルクス・アウレリウス。神谷美恵子訳，岩波。p.218.
(9) 『日本人なら知っておきたい太平洋戦争』学研。p.87.
(10) 同上書。p.8.
(11) 『知られざる日本の特権階級』宝島社。Introduction. p.2-3.
(12) 同上書。p.3.